

教職大学院

Newsletter

No. 31

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2011.04.22

板橋区における新たな教員育成の試み

東京都板橋区教育長 北川容子

東京都板橋区と福井大学は、約317km離れています。新幹線を使っても4時間以上かかります。それでもなお、板橋区の学校づくりを福井大学とともに進めたいと思ったのは、福井大学教職大学院にしかない教員育成システムに魅力を強く感じたからです。板橋区が福井大学と協定を結ぶに至った経緯をお話します。

『いきいき子ども！あたたか家族！はつらつ先生！地域が支える板橋の教育』これが「いたばしの教育ビジョン」が掲げる板橋区の教育のあるべき姿です。教育委員会では、教育振興推進計画である「いたばし学び支援プラン」を策定し、このあるべき姿の実現に向けて様々な施策を展開しています。

学校教育において何よりも重要なことは毎日、毎時間の授業の充実です。学習指導要領の全面实施を迎え、知識・技能の確実な習得とそれを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成、そして子どもたちが主体的に学習に取り組む態度を醸成しなければなりません。

しかし、残念ながら授業時間のほとんどを教師が話し続け、子どもたちは板書をノートに黙々と書き続ける授業や一部の児童・生徒が発問に答えるだけで多くの子供たちは発言することもなく進んでいく授業を目にします。もちろん、魅力ある授業を展開している教師もたくさんいるのですが、どの学校でもどの時間でも子どもたちがいきいきと学び、先生たちがはつらつと授業づくりに燃える、そんな授業が行われる学校を実現しなければならないという強い思いを抱いていました。

特に、中学校では、「生活指導、部活動指導、そして学習指導」という言葉を聞きます。これら三つの指導が中学校の教育において重要であることに異論はありません。しかし、生活指導や部活動指導に力を入れるあまり、肝心の授業の充実が置き去りにされている感があります。また、「教科担任制なので、他教科のことは分からない」とも聞きます。これも教師が相互に力を高めていく機会を失っている原因のように思えます。同じ教師として、教科を超えて、経験を超えて、子どもの視点に立った授業づくりで遠慮なく意見をぶつけ合い、確かな学力を育む魅力あふれる授業をつくって欲しいとの思いを募らせていました。

そこで、まず、改築する2つの中学校を教科センター方式にすることに決定しました。中学校の授業を充実させるためには、校舎という形を変えることから始めようと考えたからです。もう一方で、そこで授業をする教師が変わらなければなりません。

そんな時、至民中学校や丸岡南中学校の学校づくりの話聞き、

早速、教育委員会の職員を連れて福井を訪問させていただきました。福井大学教職大学院とともに歩む両校の姿を見て、また、教職大学院の合同カンファレンスで様々な学校の教師が語り合う姿を見て、板橋区でも同じようにやりたい、やらなければならないと決意しました。

この間、福井大学には多くのご協力をいただき、「福井大学大学院教育学研究科と東京都板橋区赤塚第二中学校との教職開発専攻・拠点学校に関する協定」を結ばせていただきました。次年度から板橋区立赤塚第二中学校を拠点校にさせていただき、同校の二人の教師が福井大学教職大学院の学生として、福井の先生方とともに学ばせていただきます。

福井大学教職大学院の魅力は、次の3点です。

- ①教師が学校で勤務を続けながら教職大学院で学べること
- ②大学の教員が拠点校を定期的に訪問し、学校全体を支えていくこと
- ③福井の学校づくりの実績を教師同士で直接学ぶことができること

福井大学と板橋区の約317kmの距離を超えて連携し、板橋区のリーダーとなる教員を育成していきたいと考えています。

そして、拠点校である赤塚第二中学校の研究成果を生かしながら、目指す授業の視点を次の3点に定め、全小中学校で授業改善を強力に進めていきたいと考えています。

- ①問題解決型・探究型の授業
- ②協同学習の導入
- ③指導と評価と支援の一体化

そのリーダーとなるのが赤塚第二中学校を含む4校の特別研究指定校であり、10校園の研究奨励校です。これらの学校の相互連携を図り、切磋琢磨しながら板橋区全小中学校で魅力あふれる授業づくりを進めてまいります。

内容

- 板橋区における新たな教員育成の試み (1)
平成23年度のスタートにあたって再度、教職大学院の特徴を確認する (2)
Staff紹介 (3) 院生紹介 (7) 拠点校だより (13)
フィンランド視察を終えて (15)
教師教育ネットワーク・交流のひろば (17)
日本教師教育学会第21回大会予告 (18) 書評 (20)

平成 23 年度のスタートにあたって再度、教職大学院の特徴を確認する

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻長 松木 健一

福井大学の教職大学院では、長期実践報告を 2 年間かけて作成することを教育課程の中核においている。言い換えると、入学された院生は 2 年後に長期実践報告を作成するということが、これを念頭に実践を積み重ねている。院生は、入学前に抱いていた願いや期待にかかわって、4 月当初に先達の長期実践報告を読むことで、2 年間かけて何ができるか、何が問題なのか、そして、自分は何をなすべきかについて、おおよそその見当をつけるわけである。従って院生の実践は、たえず長期実践報告というテキスト平面と、語りと傾聴というコミュニケーション平面に写像されつつ、そこからの反射を受けて実践が積み重ねられることになる。

また、実践の進展の節々で、実践について語り合ったり、読みあったりする機会が用意されており、2 つの写像平面を意識せざるを得ないのも事実である。たとえば、院生には、①学校の中での実践の省察（同僚と授業を見あって意見交換をしたり、大学教員も交えて検討会を設けて論議したりすること）に加え、②大学での月例カンファレンスでの省察（実践の報告を異学校種・異世代の教員と行い、また他者の報告をじっくり聞くこと）、③夏季休業中に他の優れた実践記録や実践理論書を講読し論議し合い、自身の実践をまとめること、そして、④1 年ないしは 2 年間の実践をまとめラウンドテーブルで報告すること（各地の実践者や研究者を前に丁寧に報告し聞き合うこと）が、学校の年間サイクルに合わせて準備されている。

こうやって書かれた長期実践報告には、幾つの特徴がある。その一つは、教育の科学法則を明らかにしようとする研究論文との違いである。長期実践報告は、教師という高度専門職業人の成長にとって欠かせないものである。熟練者は、応用性のある範例を有しているのであって、（科学法則といえるものがどれほどあるか定かではないが）教育の法則を使いこなしているのではない。熟練者は、自らの実践を語り、他者の実践を傾聴しながら、たえず自らの実践を振り返り補強しつつ、実践をより汎用性のある範例に繰り上げようとしている。過去は、終わったことなのではない。たえず新たな視点から光が投げかけられ、意味が付け加えられ、そして、明日の実践に向けた足場となっていくものなのである。このプロセスが長期実践報告には書かれている。どの実践報告も書き手が主人公であるところに大きな特徴がある。

長期実践報告には、もう一つ特徴がある。それは学校という組織を常に意識していることであろう。長期実践報告は、実践者の思い出を綴ったものなのではない。それが優れた実践報告であればある程、教師や子どもの発達と、学校の組織づくり等が分離されることなく包括的に表現されていることが多いはずである。優れた実践では、これらのことが同時並行的に生起し、さらに相互に絡まり合っただけでなく総体として範例を構成するからである。教職大学院としても組織づくりに関し、意識的に教育課程に組み込んできている。夏季休業中に読んでもらいたい書物として組織づくりにかかわる文献を紹介することはもとより、教職大学院の授業展開そのものが組織づくりの表現そのものであると考えている。省察とその再構成を繋ぐこと、少人数で語り傾聴し合うこと、時間のスパンを変え、学校種や世代や専門を変え、文字や音声などのモードを変えて実践を省察すること、支援者自身が振り返る機会を常に持つこと、これらのことが有機的に機能するためにはどうしたらいいのか。日々、悪戦苦闘しているのが、実際のところである。

実は、院生が学校で取り組む学び合う組織づくりと、大学院が取り組む組織づくり、さらには、子ども自身の学び合う関係づくり、これらはフラクタル構造をなしている。裏を返せば、大学院で体感した学習組織が、学校での組織づくりのモデルや、教室の中での子ども同士の協働のモデルになってもらいたいと考えている。だからこそ、学校での学び合う組織づくりに教職大学院が役立つことができるのであると同時に、大学院の責任は極めて重大であるということでもある。どうやら今年も、大学院スタッフは喧喧譁々の議論が続くであろう。

ところで、本年度から東京都板橋区赤塚第二中学校と、福井市立中藤小学校が教職大学院の拠点校となった。赤塚第二中学校と中藤小学校の両校とも、新たに学校建築をする学校である。学校建築の段階から学校の学びを再構築しようと意欲的な学校である。そして、教育委員会をはじめ地域の期待が大きな学校でもある。この学校の先生方が貪欲的に学びを展開することは、大学院全体の意欲を喚起し、しいてはそれが両校の学校づくりに反映するであろう。どうやら、夢や期待が広がる分、今年も忙しくなりそうである。

Staff 紹介

濱口 由美 はまぐち ゆみ

1年前に教育地域科学部（美術教育サブコース）に着任した濱口由美です。今年から、教職大学院の一員として仲間入りをさせていただきます。中学・高校と陸上部だった私は、同窓会に行くと「いつも運動場走ったなあ」ときまり文句のように声をかけられます。挨拶文として綴った今回のエッセイにも、その余剰が感じられるかもしれません。

ラウンドテーブルから、こんにちは よろしくお願ひいたします

2月25日のラウンドテーブルの日、私は2年間のインターンシップ経験をもとに実践報告した院生Kさんの「語り」の中を共に走っているような自分に出会うことができました。

Kさんの「語り」に、驚くようなパプニングが編まれていたとか、目の覚めるような教育観が発せられていたと言うわけではありません。むしろその「語り」は、日常的な教育実践の歩みとその反省の記録が壮健な一人称で語られているといった感じでした。

ですが、そんな彼の「語り」には、共時的な世界へと誘うような不思議な魅力がありました。いつの間にか、「わかるなあ。それ。でも、そうすると、また課題が一つ増えるのに。」といった合の手を心の奥底で囁きながら、その「語り」の中で院生と同じ方向を目指して走っていく自分がいました。

確かに、私は、小学校でインターンをしている彼の「語り」の中に溶け込んでいきやすい因子（1年前まで小学校教員であったことや、まだまだ未知の世界である大学での授業実践を模索する日々に身を置いているといったようなこと）を持っています。そのことも、併走者になった理由の一つだと思います。けれども、後日、それよりももっと納得のいく理由を探し当てることになりました。



Kさんからもらっていた実践研究報告書を、ふとしたきっかけで再び開いてみ

たのです。すると、そこには授業のつまづきや指導教員からの助言を思索への入り口とし、教材研究をすることの大切さ・子どもの声に耳を傾けようとする姿勢・導入時の注意事項など、初心者の彼でなければ見ることのできない授業づくりの本質が、自らの経験や感覚から導き出された骨太の言葉で連ねられていました。

私も、これまで何度か自分の実践を振り返り言葉で綴ってきた経験があります。しかし、言葉のもつ不自由さに苦しめられることが何度もありました。事実を並べても考察を練り上げても、自分に見えていた実践とは、何かがすれ違っているものが映し出されてしまうのです。いつの間にか、言葉で描かれた実践記録を、真実の出来事として受け止めてしまう自分もいたと思います。

けれども、混沌の中から探し出した言葉によって紡がれたKさんの報告書は、汗のおいとその文脈から漂ってくるようでした。うらやましいほどの素直な言葉は、前景も背景もしなやかに描き出すような想像力・創造力を抱かせる力をもっていました。報告書を読み終える頃には、ここに私が一緒に走ってみたいと思った理由があると納得するとともに、それは決してKさんと融合した1本道の併走ではないことを論してくれました。

個々の自立した道を歩みながらも、「子どもの学び」へのパスポートを交換・交感することのできるこの「語り」と「傾聴」。教職大学院では、それらの一つ一つが、自分の主張や意志をもつことと社会や共同体と世界を共有していくことが矛盾しない関係をつくる礎になることを確認しながら、一生懸命取り組んでいきたいと思っています。どうかよろしくお願ひいたします。

杉山 晋平 すぎやま しんぺい

とある学校の放課後の一コマです。教室では、地域のボランティアの方々が集まって教材を広げています。そこに、授業を終えた小・中学生が、三々五々、やってきました。皆、外国で生まれ育ち、日本語を第二言語とする子どもたちです。ここは、そのような子どもたちが、早く学校生活に馴染んで勉強についていくために、日本語を学ぶ教室です。子どもたちはボランティアの方々とペアを組み、日本語の勉強に取り組んでいきます。しかし、ある中学生の女子生徒が、顔をしかめて「やだ、勉強したくない」と訴えているようです。

「…だって、学校で5時間も6時間も勉強してきたんだよ。疲れるしよや。しかもむっずかしいし。社会とか理科とか、あと国語とか何言ってるのかわけわかんないし。だから疲れるの。何かおもしろいことしよう！」

この彼女の声に対して、どのように応答すべきなのでしょう。先のことを考えると、一刻も早く日本語を習得して、学校の勉強についていけるようになってほしい。高校入試やその後の進路を左右する問題です。しかし、心の内を素直に打ち明けてくれた彼女が求めている「別の何か」を全く無視するわけにもいきません。では、その場限り、楽しく遊んで問題をやり過ごすだけでよいのでしょうか。

その後、彼女は休むことなくこの日本語教室に通い続けながら、同様の訴えを繰り返していきました。なぜ、「勉強したくない」のに通い続けるのでしょうか。はたして、彼女にとって日本語を学ぶという場、日本語を学ぶということはどのような意味を持っているのでしょうか。あるいは、日本語教室という場で、そこにどのような意味をつくりだしていくことができるのでしょうか。

前置きが長くなり、失礼いたしました。今年度、特命助教として着任しました杉山晋平です。福井で生活を始めてまだ間もないですが、新年度を迎えた大学構内の活気はもとより、地域の方々のあたたかさ、教職大学院の取り組みと熱意に日々感動し、その輪の中に加わることができた喜びを深く噛みしめております。

生まれも育ちも北海道。学部時代を京都で送り、北海道に戻って大学院に進学しました。専門は「社会教育」で、「言語的・文化的境界上に生きる子ども・若者たちに固有の学びとそれを支える教育環境のあり方」が研究テーマです。継続的なフィールドリサーチを通じて、学校現場をはじめ、さまざまな実践場面における外国人・帰国定住者の子ども・若者たちの学習過程の分析に取り組んできました。

冒頭のエピソードは、私がこのテーマを探究する原点となった一コマです。一般的に、当該の子ども・若者たちは「ニューカマー」や「マイノリティ」と位置づけられることが多く、就学・就労において必要な知識やスキルが“欠

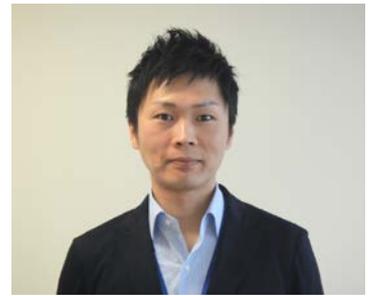
けた”存在として把握されがちです。それを前提に“標準”まで引き上げるための教育上の支援も多かったと感じます。

たしかに、そのような背景を持つ子ども・若者たちの多くは、学校生活はもとより、日本で生きていく上でさまざまな困難に直面していくという現実があります。と同時に、彼女・彼らは、実に多様な言語的・文化的コミュニティに足をかけながら、あるいは、その境界を横断しながら日常生活を送っており、さまざまな姿や表情を持っていることも事実です。私の研究課題は、当事者の具体的な経験の諸相から問題状況の理解を試み、それをのりこえ新しい局面をつくりだしていく全人的な学びの論理を明らかにすることです。

そこでは、当該の子ども・若者たちの存在によってもたらされる学びの多様性や変革の可能性をどのように教育実践の力にしていくことができるのか、あるいは、そのような多様性を育む教育実践とは何かということも問われると考えています。

北海道では、教職員、地域のボランティア、他領域の専門家、教育行政の方々とつながりながら(時として衝突し、そして、学びあいながら)、私自身も外国人・帰国定住者の子ども・若者たちにさまざまな形で関わり、実践と研究の課題を探究してきました。これまで、冒頭で紹介した日本語教室実践に加え、中国帰国者三世の高校生たちと一緒に地域の中で組織した居場所づくり実践、新しいカリキュラムや生徒支援体制の構築に挑む定時制高校の教育実践を対象にフィールドリサーチを進めてきました。教職員や専門家の方々と膝を突き合わせて時間を忘れるほど議論した日々、そして、子ども・若者たちとともに取り組んできた実践は、「教育」とは何か、「研究」とは何かを常に問い返してくれる、かけがえのない学びの経験でした。

これまでの北海道での経験、そして、これから教職大学院の一員として向き合っていく取り組み。まだ右も左も分かっていないのは承知の上で、自分の前と後ろがしっかりと連続しているという感覚が、日を追うごとに確かなものになってきました。長期にわたって実践と研究を往還しながら、現場の課題に向き合っていく協働の実践研究。異なる世代、異なる領域、そして、異なる学校や地域に開かれた学びのコミュニティ。教職大学院並びに各校の取り組みに学びながら、その蓄積と発展に1つでも多く貢献できるよう頑張っていきたいです。どうぞよろしく願いいたします。



隼瀬 悠里 はやせ ゆり

この4月から特命助教として着任しました隼瀬悠里と申します。お世話になります。こうして福井大学の教職大学院の一員として加わられたこと、大変嬉しく思っております。出身は京都で、高校の3年間は神奈川で過ごしたものの、再び大学そして大学院と京都で過ごしてまいりました。実家でのぬるま湯生活に慣れきっていたので、久々の単身生活に緊張しております。昨年度の至民中学校での公開研究会へは足を運びましたが、とんぼ帰りだったので福井へは実質的にはこの度の着任で初めてまともに足を運びました。福井のみならず、北陸地方に来ること自体が初めてです。京都駅からサンダーバードで1時間20分と意外ととても近いことに驚きました。まだ福井に引っ越してきてからは日は浅いですが、触れ合う人々から温かさを感じ取っています。そして、福井大学の教職大学院の院生とスタッフのみなさまの熱意に感銘を受けています。これから福井大学、そして福井の学校の取り組みだけではなく、福井全体について学ぶことができると願っています。みなさま、福井についていろいろとご教示ください。

このように自己紹介の場をいただきましたので、私のこれまでの歩みや研究関心、そしてこれからの抱負について述べさせていただきます。

私は2003年に京都大学教育学部に入学し、教職科目で使用されたフィンランドの授業風景のビデオ教材がきっかけでフィンランドに関心を持ち、比較教育学のゼミに所属することにいたしました。私が学部生の頃はOECD（経済協力開発機構）が3年毎に実施しているPISA（国際学習到達度調査）でのフィンランドの好成績によって、フィンランドの教育関係の書籍が出始めた頃でした。それらの書籍やフィンランド政府による刊行物等を読むなかで、当たり前のように何度も出てくる「フィンランドの教師は質が高い」という言葉にひっかかり、卒業論文からフィンランドの教師教育を研究テーマとすることになりました。特に修士論文からはフィンランドの教員養成の特徴とされている「リサーチ・ベースド（「研究」に基礎を置く）の教員養成」に焦点を当てて研究をしてきました。

フィンランドでは日本でいうところの中学校と高校の教員だけではなく、小学校の教員に対しても修士号が必要資格とされています。教育実習期間も長く、教育実習は実践研究の場として位置づけられています。実践研究を重視

するという姿勢は福井大学の教職大学院との共通点ではないでしょうか。ただ、教師となっ

てからは日本の教師の生活スタイルとフィンランドの教師の生活スタイルでは大きな差があります。フィンランドは教員養成の場で一人前の教師を育てるという考えなので、フィンランドの教員養成と学部レベルでの日本の教員養成を比較するとフィンランドの方が大変だと思いません。しかし、教師となつてからの仕事量の多さや研修の多さは日本の方が圧倒的に大変です。ですから両国の教師の生活スタイルの差というものをきちんと認識したうえで、慎重に研究を進めることを自分に言い聞かせています。

先述したようにフィンランドでは教育実習が実践研究の場として認識されており、研究成果を修士論文としてまとめることが求められています。学生時代の研究のために、そして教師となつてからも実践家研究者であり続けるために、フィンランドでは研究方法論の学習が重視されているのですが、私の研究関心は研究方法論の学習が教師となつてからどの程度必要とされるのかということにあります。自身の研究と照らし合わせて、みなさまがどのように長期実践研究に取り組まれるのかということについて大変関心があります。いろいろとみなさまにご質問等をして、迷惑等をかけることもあるかもしれませんが、何卒ご了承ください。

福井大学の教職大学院とフィンランドの教員養成では実践家研究者として教師を育てるという姿勢は共通しているように思いますが、そのアプローチは異なっているように思います。この度の着任によって福井大学の教職大学院で働くことは、私にとってもう一つのアプローチを体感できる貴重な経験となるでしょう。そして、教育現場での経験ではみなさまの多くが私よりも先輩です。私自身、先生方や院生のみなさまに教わりながら、そして学びながら教職大学院の取り組みに関わっていきたくて思っております。スタッフとして未熟なところも多々あると思いますが、みなさまと共に成長していければ幸いです。これからどうぞよろしく願いいたします。



松井 富美恵 まつい ふみえ

このたび、福井大学教職大学院でスタッフの一人に加えていただくことになりました松井富美恵です。

福井大学は、私が本学に在籍していた約40年前と比べると見違えるようにきれいにリニューアル、または新築されました。当時は学生運動の嵐が吹き荒れ、雑然とした学内でした。現在の学生は落ち着いた環境の中で気持ちよく生き生きと学んでいるのだらうと時代の移り変わりを実感しています。

昭和47年3月に本学を卒業後、障害児教育を希望していた私の最初の赴任先は、福井県立ろう学校で、ここでの教員生活が私の原点となっているので少し詳しく振り返ってみます。ろう学校は幼稚部から高等部までであり、当初私は幼稚部に配属されました。その後も幼稚部と小学部低学年を行ったり来たりで、聴覚障害児にとっては学習の最初の入り口にあたる所であり、ここで基礎作りに失敗すればこの子たちの以後の人生を左右する大問題となる、とばかり意気込んでいました。入学してきた3歳児の真っ白な土台にどんな色付けをするのか、それが私と所属の全教員にかかっているのだと真剣に考え、子どもたちと向き合う毎日でした。しかし耳が不自由な子どもをどう育てるのか、将来の自立に必要な基礎となる言語力やコミュニケーション力をどう獲得させるのか、指導内容は、方法は？と、難しく分からないことばかりで悩む日々が続きました。子どもの心や気持ちが動かないと言語の素地や言葉は育たず身に付きません。それが簡単ではないのです。子どもの聴覚を含む五感に加え第六感も動員しフルに活用すること、体験や経験することの重要性、そして家族とくに母親の協力が重要なポイントでした。そのため家庭をも考慮に入れる必要があり、自分では精いっぱい子どもはもちろん母親をも指導、フォローしたつもりでした。赴任当初は子どもの母親より年下の未熟な教員であった私にそれほどの指導力が備わっているはずもなく、若い情熱と体力に免じて母親の方から私に歩み寄り協力してくれたのだらうということは、ずっと後になり分かりました。

さらに大事なポイントがあります。今盛んに強調されている「チームで対応」したことです。その当時は声高に組織全体で叫ばれていたわけではなく、小さな集団ではありましたが若い者もベテラン教員も一緒に所属のメンバー全体で取り組んだことです。合同で活動を組み、計画から実践、反省まで話し合うなど協力し合う環境があり、その中で仕事ができただけとはとても勉強になり有り難かったです。もう一つ重要なポイントは、とりもなおさず「一人一人」への対応でした。これまた当たり前で障害状況が

個々で全く異なるからですが、人や物事とのかかわりの中で成長発達していく子どもたちに、個々への配慮や対応をしつつ、どんな場面や状況を作り成長を保障

していくかについてはなかなか大変で大きな課題でした。また、考えられるあらゆることを視野に入れ、思考を及ぼして指導にあたったつもりでいましたが、後になり思い起こせば「大きな手のひらの中」だったと思います。後になって気付くこと、分かることが結構あるようです。

その後知的障害養護学校、さらに肢体不自由養護学校へと異動し、自閉症児、知的障害児、重度の重複障害児、肢体不自由児などの教育に携わり、彼らから多くを学びました。最後は、特殊教育から特別支援教育へと転換した平成19年度に県特別支援教育センターに異動しました。学校現場とはちがった視点で、幼稚園から高等学校までを含む福井県全体の特別支援教育の推進にかかわることができたことは、私にとって貴重で意義深いものになりました。定年退職して2年目に入った今、どの経験も私の大きな財産になっています。

話は変わりますが、3月11日に起きた東日本大震災は、被災地はもちろん周辺地域や全国に未曾有の大被害と衝撃をもたらしています。命、人と社会、経済、人と物とのかかわりの深さなど多くの事を考えさせられていますが、やはり子どもたちの生活や教育は気になります。被害や復興に関する日々の報道の中、先日聞いたラジオ放送での言葉が私の心に響いたのでご紹介します。

それは、避難所での生活についてある専門家の話の中で出てきた、「奪い合えば足りない、でも分け合えば余る」と、もう一つ「悪玉ストレスを善玉ストレスに変える」という二つ言葉です。人の気持ちや考え方が生きる上でいかに重要か、一人で行うのは無理でも何人かの協力者がいれば変えられるということでもあるでしょう。この言葉は他の場面にも、そう福井大学教職大学院の考え方にも通じるのではと思いました。知恵や資源や人などを奪い合うのではなく、分け合うことで院生のみならずかかわる皆に良い結果が生じると期待しています。一方的に「学ぶ」とは考えにくく「学び合う」ものと思いますので、一緒に学び合いたいのです。うまくお役に立てるかどうかわかりませんが、どうぞよろしくお願いいたします。



院 生 紹 介

<スクールリーダー養成コース>

岡部 誠 おかべ まこと

(東京都板橋区立赤塚第二中学校)

東京都の板橋区立赤塚第二中学校の岡部です。教科は社会科です。本校は改築にともない、平成 25 年度より教科センター方式を採用した学校として再スタートします。現任校に着任して三年、昨年度は十年経験者研修を無事に終えることができました。この間研究主任として、研究テーマに基づき校内研修の深化を図ってきました。特に今年度からの三年間は、板橋区教育委員会から『指導力向上特別研究指定校事業』に指定されています。福井大学教職大学院で学んだ理論を学校現場での実践に有機的に結び付けていくことを目標に、より一層の研究の充実を図る決意を抱いているところです。

さて先日、私は神戸市を訪れました。平成 16 年度に東京都教育研究員中学校社会科の部員として活動していた折、全国中学校社会科教育研究兵庫大会に参加した以来のことです。更にそれからさかのぼること平成 7 年 4 月、私は大学卒業後の進路として神戸市に本社を置く民間企業に入社しました。ご存知のように神戸市は、その年の 1 月 17 日に阪神・淡路大震災という大惨事に見舞われていました。4 月 1 日、大阪まで開通した東海道新幹線と会社が手配したバスに乗り込み、何とか神戸市の本社で入社式を迎えることができました。そこで過ごした会社員時代の復興への軌跡は、時間の経過とともに新しい文化として継

承・発展されているように感じ、大変感慨深い旅となりました。

改めて『初心』を思い出すとともに、私自身の礎を再確認する上で、大変貴重なものとなりました。それから十数年後の現在、東北地方を中心とした未曾有の大震災が東日本を襲っています。一人一人の知恵と叡智の結集が、必ずや新しい道筋と希望の光を見出す第一歩となることを信じています。

今回、福井大学教職大学院で学ばせていただくにあたり、個人的には学業、スポーツ両面で全国トップレベルを誇る福井の教育制度はどのような工夫があるのか、また先生方の取り組みや研修制度のあり方などに大変興味があります。一方東京都板橋区からの入学者としては、行政と大学の連携により学校全体の教育の質の向上を図るモデルケースとしての意味合いを強く意識し、職責を果たす覚悟で臨んでいます。いずれにしても、私たちが互いに切磋琢磨して生み出す新しい教育活動が、生徒一人一人の生きる力の基盤となることを切に願っています。どうぞよろしくお願いたします。



名地 太輔 なち だいすけ

(東京都板橋区立赤塚第二中学校)

現在、東京都板橋区立赤塚第二中学校に勤務しております。今年で教員生活は 7 年目になります。私が福井大学教職大学院に入学を希望した理由は、本校が平成 25 年度より教科センター方式を採用した新しい学校としてスター

トすることに起因します。これまでに板橋区は、平成 20 年 1 月に『いたばし No.1 実現プラン』を策定し、これを受け



て板橋区教育委員会が同年7月に『いたばしの教育ビジョン』を策定、さらにその事業計画を具体化するため平成21年3月に『板橋区公立学校施設あり方検討会』についての報告書をまとめました。また同年10月には、区文教児童委員会での議決を受け、平成22年4月、教育委員会事務局発行の『学校づくり新聞』で本校の教科センター方式についての基本理念が区民に広く示され、現在に至っております。

そこで、教職大学院と地方自治体の協定に基づく協同研究の有用性を全国に先立って示すことを前提とし、本校の具体的かつ緊急の教育課題である『教科センター方式を活用した特色ある学校づくり』のための研究を目的とし、さらにはその成果と課題を広く教育界に提供していきたいと考えております。

以下は自分と学校で取り組んでいく課題です。

(1) 教科センター方式開始（平成25年2月予定）までの移行期間における学校運営のあり方

教科センター方式がもつ教育的効果をより高めるために、生徒や地域の実態に合わせた特色ある学校づくりの準備を進める。

- ①（教職員の視点）教員の授業力向上と意識改革
- ②（学校の視点）学校運営にかかわる組織改革と改編
- ③（地域の視点）主体的な活動を支える支援体制の確立

(2) 教科センター方式開始以降の運用と地域への発信・協力体制の構築と実践

2年間の移行期間でイメージしていた『形』が、実際の『活動』として動き出していく。学校づくりの基本方針を踏襲しながら、目の前で起きている新しい活動を定着・発展・深化させていくための方策を探る。

- ①（教職員の視点）研究授業の発展・深化・公開
- ②（学校の視点）意図的な多様な学びの設定と実践
- ③（地域の視点）地域の拠点・開かれた学校づくり

(3) 教職大学院と地方自治体との協同研究による成果と改善

2年間の研究の成果を広く発信するため、『教職大学院と自治体による共同研究』の視点に立ったレポートを作成する。

「教科センター方式」は学習面では成果を挙げている例が多いようです。そこで、課題解決学習を行うための指導方法の改善、そのための「教科センター方式」の活用方法を考えていきます。

すでに教科センター方式が実践されている学校報告や研究を見ると、教科センター方式では、各教科がすべて専用の教科教室をもっているために、次のような利点が挙げられています。

- ・集団ができることを想定したつくりで机やいすの配置ができる。
- ・教室が教科教室として固定されることで、各教科に必要な情報が教室に集まる。生徒は教科についての情報を常に手に入れやすくなる。
- ・各教科ごとに必要な学習材や教具・各教科の生徒作品等が展示・掲示され、授業の流れに応じて自由に使うことができるようになる。
- ・TT、個別学習、少人数学習・習熟度別学習などの指導がしやすくなる。

上記の利点を活用し、生徒同士の交流から生み出される学びのなかで、生徒に知識を獲得させる方法を考えていきます。教師から生徒に対しての一方向型の授業ではなく、生徒同士がお互いに自分の考えを持ち、話し合いを重ねた上で、生徒が自ら正しい答えを導き出せるようにします。教師がきっかけを適切に与えられるような授業を組み立て、「言語活動」を活用した「課題解決型学習」を行えるよう研究していきます。

<教職専門性開発コース>

北島 正也 きたじま まさや

本年度教職開発専攻に入学いたしました北島正也と申します。専門は社会科で、学部時代は社会科の評価を中心に研究を進めると同時に、探求ネットワークや心のパートナー等、子どもと関わる実践的な活動により多くのことを学んできました。しかし、学年が上がるにつれ、教科教育と教育学、あるいは学校現場がそれぞれ独立したものになってしまっていることに対して疑問を抱くようになり、教職大学院でインターンシップの経験を積みながら、それぞれの乖離をつなぐ糸口を見つけていこうと決意しました。

社会科では、個別的な事象をひたすら暗記させる授業が主として行われており、教科としての目標から大きく離れた授業が行われています。そして、それに異論を唱えた形で表れてきた、子どもの議論を中心とした授業では、子どもたちが話し合うことに重点がおかれ、社会科としての学びがおろそかになってしまっているのが実状です。私自身も学部時代の教育実習で、理論だけでは授業は成立しないことを学びましたが、子どもの活動を中心に据えることばかり考えていた授業では、結局何も身につかないまま終わってしまうという苦い経験もしました。その原因を、私は「子どもをよく見とることができていなかった」と分析し、長期インターンシップで子どもの成長を長期スパンで見とり、社会科の学力をつけることを保障しながらも、こち

らからの説明に終始しない、生徒の科学的探究過程を尊重した授業をつくれないものかと思うようになりました。

理論がすべて正しいとはいえないものの、単に経験のみに頼ることもまたすべて正しいとはいえないものだと考えています。やはり上記のように社会科授業の在り方を模索するには、実践に加えて、教師サイドと子どもサイド、両方からの「省察」が非常に重要な役割を果たすと考えています。1つ1つの授業について、他の教師とじっくり語り合いながらよりよいものに高めていく。これができる教職大学院で、自分自身を高めていきたいです。

決して他人の意見の受け売りに終始するのではなく、何度も試行錯誤を繰り返し、時には他の先生方と協働しながら、よりよい授業、さらにはそれにとどまらずよい学級経営・学校運営についても独自の見識を深めていくことができるよう、努力していく所存ですので、どうぞよろしくお願いたします。



合田 優 ごうだ ゆう

今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学しました合田優です。これから1年間、福井県立福井東養護学校にて長期インターンシップをさせていただくことになりました。専門は特別支援と英語です。不安と期待が入り混じるスタートとなりましたが、気を引き締めていきたいと思えます。

私は学部時代において探求ネットワーク、ライフパートナー、小・中・特別支援学校教育実習の実践的な学習を通して様々な校種、学年の個性あふれる元気な子どもたちと交流してきました。教育実習では各校で子どもたちや先生方の助けにより、充実した実習を行うことができました。

特別支援学校実習において「特別支援は教育の原点」という言葉と出会いました。それが印象に残り、私の当面の道標となりました。特別支援に

対する違和感や不安感があった当時「特別支援が教育の原点であるならば教育者を目指す者として学ばなければ。」と思いつち、本格的に特別支援教育を学び始めました。

学部時代のライフパートナーは、実践的な学びの中で私自身に大きな影響を与えるものとなりました。1年目は学



習障害のある子どもの支援、その後2年間は学校不適応の課題を抱える子どもの支援者としてじっくりひとりの子どもと係わりました。不安定な中でも前を向いて成長していく子どもの様子を感じ、未熟な支援であっても子どもから良い反応が返って来るとそれは嬉しいものでした。それと同時に、係わり方の悩みや疑問が増え、先生方に助言を頂きながら、より良い活動方法を探る日々でした。毎回欠かさずに書いた活動記録は、後々、財産となりました。活動記録を読み進めると点と点が繋がるように視界が開け、物語の背景が見え、子どもは様々な背景を抱えて私と係わっているということを改めて考えるようになりました。目

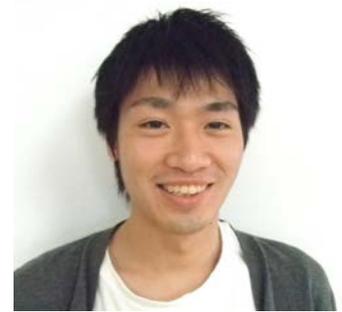
河野 紘典 こうの ひろのり

こんにちは。今年度、教職大学院教職専門性開発コースに入学しました河野紘典です。これから、1年間、附属中学校で長期インターシップをさせていただくことになりました。

私は、名古屋の南山大学からこの教職大学院に入学しました。大学時代は、3週間の教育実習しか経験していませんが、本当に多くのことを学ぶことができました。しかし、この経験によって現場に出る不安も多く抱えることになり、教職大学院に進学することを考える機会になりました。この教育実習で2つの不安と課題ができました。1つ目は、授業をすることの難しさです。大学での模擬授業では、指導案通りに進めることができおり自信がありました。しかし、実際に現場で授業を行ったところ、私がする発問の意図が上手く伝わらず、21回の授業全てが上手くいかずに終わってしまい、自信を失ってしまいました。その原因は生徒実態の把握がしっかりとできていなかったことでした。大学の模擬授業は、大学生が生徒役であるため私の求める答えにすぐ繋がるため上手くいっていたことに気付かされました。2つ目は、教師という仕事の大変さです。教育実習の3週間は授業準備だけで多忙に思いましたが、実際に現場へ出ると授業準備の他に校務分掌、学級運営、部活の運営などまだまだ知らない仕事が多くあることを知りました。そのため、私が実際に現場に出たら授業準備に追われ、そのほかの仕事に追われ、生徒一人ひとりをちゃんと見るができないと思いました。これらの不安はたった3週間の教育実習で気付いたことです。医者は現場

の前の子どもの姿を見るだけでなく、子どもの置かれた環境や背景を考慮し、子どもが安心していられる場を提供することが大切だと感じました。活動記録や言葉にして語ることの重要性を知ることができた学部時代の経験を今、新たな段階においても生かすときが来ました。教職大学院の特色を存分に活用し、吸収していきたいと思います。

今後2年間、先生方のあたたかいご指導を頂き、贅沢な環境の中で勉強させて頂くことに感謝しております。一学生、一教員の両面からしっかり学びたいと思います。よろしく願いいたします。



に出るまで長い期間のインターシップを経て、初めて一人で患者を見ることとなります。しかし、教師は、1ヶ月ほど

の実習だけで現場に出ないといけないことに私は不安を覚え、教職大学院で本当の教師の仕事を学びたいと決意しました。いくつかある教職大学院で福井大学教職大学院は、1年間の長期インターシップを経験できることに魅力を感じ入学しました。

この文章を書いている現在、インターシップが始まって1週間しか経っておらず、まだ始業式と入学式が終わっていません。また、実際に生徒と関わるといことは経験していません。しかし、生徒が学校にいなくても教師の仕事は始まっており、第1回職員会議から参加させていただき改めて教師の仕事の多さに驚きました。私は中学1年生の学年会に参加させていただいています。1年生が入学してすぐ授業できるように多くの雑務があり、クラスに置くペン一本一本にクラスのシールを貼る仕事や健康診断表をクラス別出席番号順に並べる仕事やそのほかも多くあり、生徒として学校にいた時と違い学校の内側を知りました。これから1年間のインターシップは私にとって貴重な時間だと思います。一つでも多くのことを学び、多く教師の仕事の総体を経験して少しでも現場に出た時に不安や課題が少なくなるように頑張っていきたいと思います。

小島 俊祐 こじま しゅんすけ

こんにちは。今年度、福井大学の教職大学院教職専門性開発コースに入学しました、小島俊祐です。出身は神奈川県で、教育が盛んとは聞いてはいましたが、縁もゆかりもない福井での進学は私にとって修行の2年間だと心に決め、臨んだ選択でした。3月までは神奈川大学人間科学部に在籍し、保健体育と臨床心理学を専攻していました。福井大学の教職大学院を選んだ、一番の理由でもある週3回の長期インターンシップは、福井大学教育地域科学部附属小学校でさせていただくことになりました。先生方は優しい人ばかりで、職員室も和気あいあいと温かい雰囲気です。恵まれた環境で学べることに期待も高まり、今からとても楽しみです。学校現場での実践からたくさん学び、吸収し、成長していきたいです。

学部の1年生の時は漠然と自分自身が学校を肯定的に捉えていたこと、また「球技は苦手だけど、身体を動かすのは好き！体育が苦手な生徒の気持ちを理解できるかも！」といった理由で中学校の保健体育の教員になりたいと考えていました。しかし、不登校支援のボランティアを始めてから、教員を志望する動機が変わりました。小学生でもたくさんの不登校児童がいるなどの現状を知ったこと、学校に行こうと思っても行けないことに苦しみ悩む子に出会ったこと、ある生徒から小学校時代に戻ってやり直したいと言われた経験等から、小学校の教員になって学校現場で子どもたちを支援したいと考えるようになりました。

た。また、児童相談所の一時保護所にいた子どもに出会った経験からも、必要な理解と支援を要する子どもがいるこ



とを知り、多くの子どもと長く関われる小学校で働きたいと志願するようになりました。

実際に子どもたちと関わっていて、他者を理解するということは簡単なことではなく、ただ目の前で見る言動や姿をそのまま受け入れるだけでは、一面的な理解しかできないと痛感します。子どもの心とも向き合い、理解しようとするために、子どもをしっかり見取ること、可能な範囲でその子の置かれた環境や行動の背景までも配慮に入れ考えること、専門的な知識を身につけることも必要だと思ふようになりました。しかし、教育実習や学校ボランティアで感じたことは、“想いだけでは何もできない”ということでした。教員になるからには、授業の中での指導力を磨く必要があると考えています。根底となる指導力を磨き、児童をしっかり見取り、個々を意識した授業を展開できる教員になるために、未熟者ながら一から頑張りたいと思います。

今まで出会ってきた人たちの想いと“一歩前に！”を胸に、学びに対して真剣に取り組み、価値ある2年間にしたいと思います。どうぞ、皆様よろしく願いいたします。

角田 望 すみだ のぞみ

こんにちは。今年度から教職大学院教職専門性開発コースに入学した角田望です。3月まで富山大学に在学していました。現在は美浜中学校で、久しぶりの福井で久しぶりの関西訛りに囲まれながらインターンシップをさせていただいています。

私が教職大学院に進学しようと思った理由は、1年間の長期インターンシップに魅力を感じたからです。富山大学では、附属中学校で2週間、公立中学校で2週間の実習をさせていただきました。この実習から私は、生徒への言葉

がけの大切さや、授業について様々なことを学ばせていただきました。この教育実習での私の目標は、「楽しい体育」



の授業をつくることでした。生徒全員に体育を好きになってもらいたい、生徒をもっと伸ばしてやりたいという気持ちで授業作りを行っていたつもりでしたが、中には体育館の隅で輪になって話している生徒も見られました。この経

験からでは、「楽しい体育」ではだめだ、「すべての生徒が楽しめる体育」を作っていかなければならないと強く感じました。

この教育実習の経験から、私はインターンで「すべての生徒が楽しめる体育」の授業作り、そのための生徒への声のかけ方を1年間という長いスパンで生徒たちと触れ合いながら、また現職の先生方から学ばせていただきたいと思っています。もちろん、体育だけではなく特別活動や総合、学活などでも生徒と多く関わっていききたいと思います。そして、生徒との関わりや授業作りのことはもちろんですが、職員会議や学年部会などにも積極的に参加させていただき、教師同士の関わりや、学校経営についてたくさんの

ことを学んでいきたいと思っています。

先日、さっそく第1回目のカンファレンスが開かれました。同期のM1の思いを聞く貴重な時間で、たくさんの考えにとっても刺激され、自分もみんなに置いていかれないように頑張ろうと思いを新たにしました。

美浜中学校の先生方は、校長先生をはじめ、教育に対して熱い思いを持っておられる先生方が多いです。そのような中で一緒に働かせていただくことを大変嬉しく思います。1年間、この美浜中学校でたくさんのことを吸収し、2年後に素晴らしい教師になれるように日々努力していきたいと思っています。これから2年間、多くの方々にお世話になると思いますが、どうぞよろしく願いいたします。

佐々木 梨衣 ささき りえ

はじめまして。今年度、教職大学院教職開発専攻に入学した佐々木梨衣です。担当教科は社会科です。4月からは、福井大学教育地域科学部附属小学校でインターンシップをさせていただくことになりました。

私が教師を目指し始めたのは中学生の時です。どちらかという勉強が苦手な中学生で、当初は「教師」に魅力を感じることもありませんでした。ですが、中学校2年生の社会科の先生の授業が非常に興味深く、次第に社会科が好きになり、勉強を通して「わかる」喜びを知ることになりました。そして、「教師」として私自身も「わかる」喜びを持てるような授業をしたいと思うようになりました。教育学部に進学し、探求ネットワークや教育実習などを経験するうちに、一人ひとりの子どもを理解することなしには、授業を考えることができないのではないかと思うようになりました。「もっと、子どもたちと一緒に過ごして、子どもたちの実態に合った授業をしたい。子どもたちの成長を感じ取りながら授業を行えるようになりたい。」と強く思うようになりました。そのため、長期インターンシップがある教職大学院に進学を決めました。

長期インターンシップでは、クラスの子どもたちのつぶやきや、言葉を大切にしたい授業作りを展開したいと思って

います。これは、主
免教育実習の時に、
担当の先生から指摘
され、意識するよう



になりました。指導案通りに進めるのが授業なのではなく、その場の子どもたちの思考や言葉を拾いながら、子どもたちと授業を作り上げていくことこそが大切なのではないかと思っています。また、子どもたちが問いについて「じっくりと思考する」授業作りをしていきたいと思っています。社会科だけでなく、他の教科の授業にも挑戦していきたいと考えています。そのような点で、長期インターンシップは、1年間じっくりと子どもたちと関わることができるので有効ではないかと思っています。子どもたちと一緒に「どうしてだろう?」と考えられるような授業作りを、インターンシップで学んでいきたいと思っています。そして、学級経営や子どもたちとの関係作りについても、しっかり学びたいと思っています。現在、始業式も行われる前ですので、「早く子どもたちに会いたい」と、始業式の日が非常に待ち遠しいです。一つひとつを確実に吸収できるように、全力で頑張っていきたいと思っていますので、どうぞよろしく願いいたします。

拠点校だより

東京都板橋区立赤塚第二中学校 名地 太輔

◎立地

東京都と埼玉県の境目あたりに立地しており、同じ板橋区立の成増ヶ丘小学校と同じ敷地内にあります。そのため、小学校と比較的に連携が取りやすく、学習指導及び生活指導上の円滑な接続・連携を図るため、主に下記の方策をとっています。

①全教科における連携（学習上のつまずきの解消，基礎学力の定着，向上）

- 中学生による小学生への学習支援（教科・特活・部活動等を含む。）

中学校の部活に小学生を体験入部させます。

- 小・中学校の教員によるティーム・ティーチング
- 中学校教員による小学生の教科指導
- 小学校教員による中学生の補習

②防災における連携（防災意識，防災技術の向上）

- 合同学校防災連絡会
- 合同下校訓練

中学生が小学生を連れて下校します。

③地域活動（地域への愛情・貢献の精神の醸成）

- 地域清掃

毎月一回，地域の商店街の方々，小学生とともに地域を清掃しています。

- 伝統文化体験活動（成増里神楽，童謡）

地元に里神楽という伝統芸能があり，本校で毎年公演会を行っています。

◎学校の教育活動の充実

現在，赤塚第二中学校を改築しており，プレハブ校舎で授業を行っておりますが，25年度に教科センター方式の校舎が完成します。そこで，「探究的な学習」の推進，「言語活動」の充実，「協同的な学習」等の学習形態の工夫等に力を入れて研究を進めていきます。

- ① 「教科センター」・ICT機器（電子黒板等）の活用の研究

- 福井大学教職大学院との連携

- ②目標に準拠した評価の実施



- 評価計画に基づく評価の実施

- 観点別学習状況の評価・評定の在り方，評価規準の明確化

③学習習慣の確立

- 家庭学習の充実

- 保護者会や面談等で，家庭学習の習慣の確立について保護者に理解を求めます。

- 朝学習，朝読書の充実

④学力補充指導の充実

- 朝学習や放課後，長期休業日等の活用

- 「フィードバック学習教材」の活用

- 「スタディルーム」の充実

◎体験活動の充実

「総合的な学習の時間」を使い，問題解決能力やプレゼンテーション能力の育成，適切な職業観や労働観の育成，生き方の学習に取り組んでいます。

①多様な体験活動を通しての学習の充実

- 各教科等の基礎的・基本的内容の定着

- 生命の大切さの理解

- 思いやりの心や規範意識の醸成

②多様な体験活動の設定

- 職業体験（商店や事業所等での体験活動）

- 上級学校訪問

- 福祉体験（障がいのある方やお年寄りとの交流体験）

- スポーツ体験（1年スキー教室）

- 自然・農業体験（2年富士見高原移動教室）

- 伝統文化体験
(里神楽・童謡
(清水かつら)、
3年修学旅行
等)

- 国際交流体験
(留学生との交流)

- 社会貢献活動(ボランティア活動)
- 校内・校外美化活動



◎校内研修

前記で紹介したように、今年度は教科センター方式の授業を見据え、校内研修に力を入れていきます。

内容は次の通りです。

- ①「校内テーマに基づく研究」に効果的に位置づける。
主題 『新学習指導要領における指導の工夫』
副題 ～言語活動を重視した授業実践～

目指すべき方向性をより明確なものとし、教科指導に重点を置いた研究を進める。特に中教審答申や新学習指導要領で示されている課題の中でも、本校の実態に即した教育課題に焦点化させた校内研修を深化させる。

- ②現状の把握(教員のアンケート、今後行うことが決まっていること)

- ・平成22年度の校内研修で、思考力・判断力・表現力等を養う必要性を協議した。

思考力・判断力・表現力等を養う必要性については、中教審答申やPISA結果などをふまえ、新学習指導要領でも明記されている。本校では今年度の校内研修で、この思考力・判断力・表現力等を養う有効な手段として、『知識・技能の活用』と総合的な学習の時間で示されている『探究的な学習』を提案した。

- ・平成23年度からの2年間、福井大学教職大学院との連携が始まることになっている。

教科センター方式への効果的な移行を支援するため、福井大学の専門的な理論と本校の校内研修の実践を通じた協議を行う。

- ・平成23年度からの3年間、板橋区教育委員会の『指導力向上特別研究指定校事業』に本校が指定され、更に平成25年度から教科センター方式導入が決定している。

板橋区教育委員会の『指導力向上特別研究指定校事業』では、「問題解決型の授業展開など、指導方法の改善が必要」と示されている。

- ・教科センター方式における教科教室とメディアスペースとの活用について研究を深める。

現在の本校の校舎では検証できないため、現状の校舎で教科センター方式の一部展開を実践している板橋第五中学校と連携を図り、教科教室とメディアスペースとの活用について研究していく。

- ・教科センター方式における生活指導の在り方や教職員間のつながりや連絡方法、教科教室の利用の仕方についての今後ルール化を進める。

生活指導の在り方、教職員間の連携のあり方など、生活指導に関する運用については別途協議し、校内研修では教科指導の視点から研究をすすめていくこととする。

- ③目標(主題)の設定

生徒の目指すべき姿 … 生徒一人一人の学力向上

- ・3年間共通の大目標(主題・仮)

生徒の主体的な学びを重視した授業の工夫・改善
～教科センター方式の導入と活用を通して～

- ・本校における『問題解決型の授業』の重点

主として、課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等を身に付けさせるため、以下の要素を含む学習活動を『問題解決型の授業』の重点とし、研究を深めることとする。

ア、学習活動の基盤である言語に関する能力をふまえた授業

イ、知識、技能の活用を重視した授業(H22年度校内研修で明らかになった視点)

ウ、探究的な学習を通じた授業や他者と協同して取り組む授業

エ、小中連携教育の視点をふまえた授業

- ・本校における『知識・技能の活用』の理解

各教科等で習得した基礎的・基本的な知識・技能を実際に活用する力の育成を重視した学習活動。

ア、習得(基礎的・基本的な知識・技能の育成)

イ、活用(知識・技能を実際に活用する力の育成)

ウ、探求(自ら学び自ら考える力の探求)

フィンランド視察を終えて

3月1日ー3月10日までフィンランドを訪問し小・中・高等学校や大学での取り組みを視察してきました。今後、数回にわたって訪問記を紹介していきます。

フィンランドはプロ野球，日本は高校野球？

福井大学教職大学院 川上 純朗

「なるほど、フィンランド社会はプロ野球，日本社会は高校野球なのですね。」

フィンランドから帰国後、見聞してきたことを脈絡もなく話す私の脇から、聞いていた現役の教師が発した言葉である。この例えが妙に的を射ている、伝えきれないもどかしさを一気に吹き飛ばしてくれた。たった10日間の視察でフィンランドの社会や教育を語る資格はないと自覚しつつも、ここでは、この例えに沿ってフィンランドと日本を比較してみたい。

最初に断っておくが、フィンランド社会をプロ野球，日本社会を高校野球と例えたのは、そのレベルの違いからではない。従って日本社会のレベルがフィンランドに比べて劣っていることを表現しているのではない。むしろ思想や構造、あるいはもっと深く哲学の違いを表現したものである。どちらが優れているとか正しいと論ずるつもりもない。それぞれの歴史や国の背景、文化の違い、国民性の違いなどから築き上げてきた制度は、それぞれがニーズを満たしている部分もあるし、逆にそれぞれの課題もある。

なら、なぜこの例えが的を射ていると感じたのだろうか。

プロ野球の目的は、何だろうか。これは勝つことの一点に絞られる。勿論高校野球も勝つために全力で闘う。しかし勝つことが全てかと問われるとそうでない部分もある。

フィンランドの社会や教育制度は、監督（国家）が勝つ（国家が存続・繁栄・発展すること）ために創られた制度である。少なくとも私にはそう見えた。フィンランドは、人口500万人余りの資源が少ない小国で、過去には隣国から侵略され国家が消滅するなどの多くの苦難を乗り越えてきた。そこで国家がとった政策の一つが、教育の大改革だった。人が最大の資源だと考えたのである。その目的は明確で、ここに生活している人（移民も含めて）全てが、フィンランド社会の中で何らかの役割を担える社会人となるように教育を施すこと。教育にかかる費用はほぼ全て国家が負担し、それぞれの能力や個性に合わせて手厚く教

育することで、全ての国民を自立した社会人として成長させ、国家を支え結果的に高い税金を支払える納税者となってもらい、このようなサイクルを築くことが意図されている。

フィンランドでは、18歳を過ぎた段階で自立した大人として扱われ、多くは親から独立していくという。逆に言うならばそれまでに自分は何の道を選ぶのか、そのために今後どのようなプランで何を学ぶ必要があるのかを少なくとも自覚していなければならない。

短い時間で高い専門性を求められるとなるとオールマイティではなくスペシャリストの養成となる。フィンランドでは、幅は狭いがそれぞれの分野でのスペシャリストを組み合わせて社会がつくられている。即ちそれぞれの高い専門性を有した選手やスタッフをうまく組み合わせて勝ちを求めるプロ野球集団に例えられるのである。この構造はフラクタルに学校現場にも存在し、子どもに学力を養成することに特化したスペシャリストの教師がそれぞれの専門性を発揮して教育にあたるが、学校そのものはそれだけでは経営できないために、進路指導に特化した学習進路カウンセラーや生徒指導を担当する「生徒サービス担当」、特別支援が必要な子に対する支援員、その他学校運営に必要な経理や警備など細分化された専門家がそれぞれの能力を発揮する中で、全体的に高いサービスが実現できている。マネージャー（学校では校長）がよくTrust（信頼）という言葉を使ったが、プロ野球の監督もそれぞれその技能によって年俸を得ているスペシャリストがその技量を存分に発揮してもらうことをTrustすることが、勝利への近道であることと同じである。プロ意識を持たせる（Trustする）ことで個々の研鑽意欲を高め、結果チームが高いレベルを維持しているのである。

日本の社会はどうだろうか。日本では、個々人の能力や個性よりチーム間の横の繋がりを重視する。従って学習は、個々人がどれだけ獲得したかではなく、チーム全体でどれ

だけ獲得できたかが大切になってくる。達成できなかった個も達成できた個がカバーしていけばよいとの発想である。それより人同士協力したり、力を合わせたりすることで、個人では達成不可能な高い目標でも達成できることに価値を見いだすよう仕込まれている。まずチームが優先され、準備から練習後の始末、その他の雑用、場合によっては生活まで共にして協働の力で勝利を目指す高校野球の姿に似ている。勝つという結果よりチームワークという経過を重視することで全体の士気を高めているのである。学校でも同様にフラクタルな構造を有し、教師は学校経営の全体を掌握できるオールマイティであることが求められる

るために、一人前になるまでかなりの時間と多様な技能・能力を習得することが求められる。それまでは、チームでお互いの弱点を補完する必要があり、協働して共に支え合うことが第一義に求められるのである。

大震災の際、過酷な状況の中でも秩序が守られている日本人の姿を見て、世界が驚愕した。それを日本の教育の勝利と見るか、国家や自治体など社会に著しく依存しているひ弱な個とみるか、様々な見方があるであろう。しかし課題は真逆だが、全く違った発想からも日本を超える成果をあげている国が存在していることを知れば、弱点を補う発想が生まれてくるのではないかと思うのである。

福井大学教育地域科学部 理数教育講座理科教育 山田 吉英

フィンランドの学校で行われている授業は極めて「普通」であった。教育内容も、教育方法も、日本の授業とあまり変わらない。日本にもフィンランドにもいろんな教師がいて、各々工夫をして授業を行っているわけで、それくらいの多様性はごくごく普通のことであろう。一方、フィンランドには日本の学校にあるような公開授業、授業研究という習慣が無い。「我々は教員を信頼 (trust) している。したがって彼らの授業を見に行ったことは一度もない」とある管理職は言い切った。「協働」というよりは「信任」の文化である。

授業内容・方法は日本と大差ないのだが、高校生の雰囲気は日本とはだいぶ違って感じられた。選択物理の授業を見学した際、一人の男子生徒が少し遅刻して教室に入ってきた。少し派手目な外見から、どこの国にもやんちゃな生徒はいるのだな、と思って見ていたのだが、最前列で先生の真ん前に座り、熱心に授業を受けている。この生徒に興味を湧いたので、授業後「授業に満足したか？」とたずねたところ、「もちろんだ。私は自分の将来に役立つ新しい知識を得ることができた」と堂々と答えたので驚いた。日本であれば、ちょっと茶化した言い方になったり、同級生が笑ったりするのではないか。

フィンランドでも小学生などは子どもらしさ全開で、日本と同じだと感じるのだが、高校生の雰囲気がずいぶん大人びている。思うに、フィンランドは個人主義かつ高福祉社会、日本は集団主義かつ競争社会である。社会が異なれ

ば教育や学習という営為も自ずと異なる。個人として自立して社会的責任を果たそうとするか、場の一様性を壊さぬようこっそりと自分に有利な条件を獲得しようとするか、行動の仕方も変わってくるだろう。

フィンランドでは義務教育に限らず、すべての教育が無償で行われている。大学ですら無償であり、返却不要の奨学金まで支給される。市民がそれだけの税を収めているわけだが、人材育成によって自分たちの社会をよりよくするという投資意識がなければそのような制度は不可能だろう。意欲と潜在的な能力を持つ者には学ぶ機会を開放し、高度な能力を獲得した人材を増やすことがすべての国民のためになると考えられているのだろう。

そしてまた学習によって実質的な能力の獲得が要求されるため、試験も論述式が主流となっている。一方、日本では語句の単純記憶やパターンマッチング的な処理能力の高さで学力を測定する。この結果、フィンランドでは本を読むことが学習の中心となり、日本では暗記やパターンマッチングの練習が学習の中心となる。どちらがより内容の実質的理解、能力獲得に資するかは明らかだろう。

フィンランドにおいては義務教育段階でも高等学校段階でも、勉強不足を感じれば在学期間を延長することができる。留年は平等な学びを保証するための権利という意識がある。大学も日本のように4年間で卒業するように標準化されておらず、学習者個人個人のペースで必要な単位を取得し、学位を得て卒業する。学習内容の理解、能力の獲得

には手間ひまがかかることが了解されているのだろう。フィンランドには新卒の一括採用というものはなく、日本の就職活動の話をするフィンランド人は大笑いすることである。日本のように忙しさに追い立てられ、中身が未消化のまま「強制スクロール」で人生が進んでいくわけではないということだ。

帰国後、フィンランドの教育に関する書物を何冊か買い求めて読んだのだが、著者によって物事の受け取り方は様々である。あくまで私の主観的な判断で良書と思われるものを紹介しておきたい。まず、高校留学記として、高橋絵里香『青い光が見えたから』（講談社）、実川真由・実川元子『受けてみたフィンランドの教育』（文藝春秋）の2冊を読み比べると面白い。前者は日本的な場の抑圧から個人が開放される過程を描いており、後者はより分析的にフ

ィンランドの高校教育を眺めている。靴家さちこ・セルボ貴子『住んでみてわかった本当のフィンランド』（グラフィック社）は現地の生活が日本人の目から見て等身大に描かれており、雰囲気伝わってくる。リッカ パッカラ『フィンランドの教育力』（学研新書）はフィンランドの小学校教諭へのインタビューをもとに構成した教師・教育論。根本的には日本の小学校教諭の考え方とあまり変わらないように思うのだがどうだろう。より客観的な情報を得るための包括的な論考集としては庄井良信・中島博『フィンランドに学ぶ教育と学力』（明石書店）が参考文献も豊富で便利であろう。最後に、個人的に最も共感できたのは佐藤隆『フィンランドに学ぶべきは「学力」なのか!』（かもがわブックスレット）であった。薄い講演録なのですぐに読める。ご一読を勧めたい。

教師教育ネットワーク・交流のひろば

このコーナーは、全国各地で教師教育に取り組んでいる教職大学院や既設の大学院等の実践と研究の交流の広場です。たくさんの投稿を期待しています。

院生が学校の同僚と共に語り、考え、創る「開発実践報告」 —これまでの歩みを振り返って大切にしたいこと—

石川 英志（岐阜大学大学院教職実践開発専攻）

岐阜大学教職大学院は平成23年度をもって4年目を迎える。これまでの紆余曲折、試行錯誤の歩みを振り返り、その特色というか社会的に発信する意味があると思えるものは何かと言ったら、やはり従来の大学院の「修士論文」に代わるものとして設けた「開発実践報告」ではないかと



<連携協力校で授業をめぐる自発的に話し合うコミュニティ形成>

考える。

私たちの教職大学院は4つのコース（学校改善・授業開発・教育臨床・特別支援学校）に分かれているので、院生の人達（現職教員・ストレートマスター）は所属するコースで「開発実践報告」を作成することになる。その目的等について、少々フォーマルに述べておくと、現在の学校や教育実践が抱え、また直面している学校教育課題をテーマとしてその解決のビジョンや方法を研究開発し、それを学校や地域に提起・還元することを目的としている。そのプロセスにおいて重要なのは、①自らの研究開発の課題を、現職教員の場合勤務校の同僚との協議、ストレートマスターの場合自らの実習分析省察及び実習校指導教員との相談、つまり開かれた協働の基盤の上に設定すること、②連携協力校（勤務校・実習校）をフィールドとして実践的に研究すること、③探求したプロセスと成果、その社会的意

義を論文の形にまとめ、連携協力校や教育委員会の関係者が参加する開発実践報告発表会、勤務校のある各市町村教育委員会の研修会等の場において報告提案する、というものである。研究課題が個人の実践の範囲にとどまるものではなく、広く多くの教員や学校と共鳴、共有するものであること、単に課題を明らかにするだけではなく、課題解決のための一定の方法や内容を示すプログラム性を提示することを通して、開発実践報告の社会的意義、有用性等を、いかにどこまで自覚し、開発実践したかという形で、理論と実践の融合を一人ひとりの院生が追求することとなる。

ここから「開発実践報告」について、私がこれまでに経験してきたことをもとに少し述べたい。あらためて実感するのは、教育に関する論文は学校の同僚との議論や協力が支えとなってはじめて書けるということである。「開発実践報告」でこれまで担当した修了生は、現職二人とストリートマスター二人であり、研究室でのゼミで共に考え、議論するだけでなく、連携協力校に足を運び、実践に即してそこに勤める先生方も交えて話し合えた。紙幅の関係で現職に絞って記すが、そこで大切にしてきたのは、現職の中津川市の中学校の吉村彰夫さん、恵那市の小学校の西尾朋

子さんの考えていること、取り組みたいこと、願っていることをつねづね勤務校の同僚の人達の前に出し、議論し、そのことの上に立って共に取り組むということである。その意味で、できあがった論文は本当に同僚との協働作品、協働労作となった。私も二人のやろうとしていることの意味を、職員室や会議室で第三者の視点からということでも話したり、それぞれの教育委員会にも出かけて、協力を依頼したりした。私にとって、吉村さんや西尾さんを入口に、学校の先生方と議論できたのは大きな学びであった。この間、二人は先生方の悩みや語りや願いと向き合い、相互につながり、そうしたプロセスで信頼を寄せられ、スクールリーダーという上から目線の言葉を使わずとも、そうした役割を自然と担っていった。彼らと出会い、授業を軸とした学校づくりの地道な過程に身を置けたことは大きな喜びとなったのである。



<西尾さん作成の校内授業研究パンフ>

今年 9 月に日本教師教育学会、福井大学で開催される！！

日本教師教育学会第 21 回大会を今年 9 月に福井大学で開催することになりました。この学会は 1000 名近い会員がいますが、研究者だけではなく現場の先生方や教育行政関係・一般市民等、様々な職種の方が参加されています。大学と学校とを結ぶ学会として貴重な存在です。以下の内容で準備していますので、ご協力をよろしくお願いいたします（森透・大和真希子）。

<日本教師教育学会第 21 回福井大会要項>

日時：2011（平成 23）年 9 月 17 日（土）9 時から－18 日（日）17 時まで

場所：福井大学教育地域科学部 1 号館（文京キャンパス）

<大会テーマ：講演会およびシンポジウム企画>

教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティ（professional learning communities）と大学の役割－大学と学校との協働研究の展望を探る－

<大会趣旨>

知識基盤社会に生きる力を培う学校をどう実現するか。20 世紀の学校、そこでの定型的学習の伝統を超えて、探究しコミュニケーションし協働する学習の文化をどのように創出していくか。学校改革への取り組みと試行錯誤が世界で、ま

た日本で、並行して進められている。

そうした改革の実現において、新しい学校づくりの主体が教師であり、その専門的な力量形成こそが、学校改革の鍵となることが繰り返し確認されている。しかし、この鍵となる教師の実践的な力量形成という課題に関わって、従来の教師教育のシステム、伝統的な教員養成と現職研修では、それに応えることが困難であることもまた明らかになってきている。伝統的な伝達型の学習モデルに囚われた養成や研修は、古い学習の様態を再生産・再強化するに止まり、新しい学習を実現する力にはつながらない。既存の枠組みを温存したままの表面的な変化にすぎない「教師教育改革」はすでに四半世紀以上にわたって空転を重ね続けている。改革をめぐる取り組みの多くは、そのもっとも新しい企図である教職大学院をも含めて、カリキュラムにおいて、また組織において、こうした問題を克服できていない。

しかしそうした現実、そして試行錯誤の中にあつて、教師の実践力形成のための新しい学習プロセスを実現していこうとする模索、実践と研究が、少数とはいえ、積み重ねられてきている。こうした希少ともいえる取り組みの蓄積と成果を踏まえて、現在、学校を教師が専門職として実践に即して学び合うコミュニティへと転換し、持続的協働的な実践力形成を目指そうとする取り組みに関心が寄せられてきている。それは、これまでの伝達型の短期研修やワークショップ中心のパターンを根本的に組み替え、学校を拠点に教師の長期にわたる協働的な実践力形成の可能性をひらくアプローチとして期待されている（「専門職学習コミュニティ Professional Learning Communities」）。学び合うプロセスの持続が直接に学校における協働の実践の展開と新しい学習文化の形成につながっていくことがこのアプローチの大きな特長である。日本における校内における授業研究は、現在、Lesson Study として、世界にも広がり、学校における専門職学習コミュニティの取り組みの核心として位置づけられるに至っている。（秋田喜代美、キャサリン・ルイス編『教師の授業の研究教師の学習：レッスンスタディへのいざない』明石書房、2008）

今回のシンポジウムにおいては、教師の専門性形成のためのコミュニティを支える大学の役割について考えたい。従来教師教育は大学における「養成」、教育委員会による「採用」、そして実践の場に関わる「研修」という3つの場を意味してきた。しかし、教職大学院の設置、教員養成6年制構想、採用システムの公開性、教員免許更新制の義務化など、新たな政策が国から提起されている現実には、その正否はともかく、現実の教師教育の3つの場が根本から問われていることの現れといえる。諸外国の教師教育をみると、大学院も視野に入れた養成システムが一般化しつつあることを考えると、日本の教師教育の展望、特に大学の役割を問い直すことが求められている。サブテーマの「大学と学校との協働研究の展望を探る」は、教師の専門職としての力量形成を支える学習コミュニティの創造のために大学が学校をベースに理論と実践の統合・架橋の課題と正面から向き合うこと、そして大学の研究者と実践者がフィールドを共有し現実の学校の抱える課題を協働して解決する学習コミュニティを創造することにあるのではないかと考える。

① 講演・ハッカライネン氏（14時—15時） *通訳・富山大学 北田佳子氏

（現在フィンランド・オウル大学カヤーニ校教授）

フィンランドの現状と課題、ナラティブ・ラーニング等について。大学と学校との協働研究の紹介。2009年10月福井市市民中での国際シンポに参加された感想など。

② シンポジウム（15時15分—17時30分）

*コーディネーター：福井大学 松木健一氏

*福井大学教職大学院：福井県教育研究所主任（前至民中学校研究主任）牧田秀昭氏→学校現場の立場から福井大学と拠点校の関係、インターンシップの現状と教師教育の関係

*大阪教育大学大学院（夜間大学院）大脇康弘氏→既設大学院（夜間）における大学と学校との連携・協働について

*私立大学：盛岡大学学長 望月善次氏→滝沢村との協働（ラーニング・サポータープロジェクト・不登校支援＝村の教育委員会主導で地域の小学校12校との連携）

③ パネル展示（2階フロアー）

※前日16日には福井市至民中学校の授業参観を予定しています。

<組織体制> 実行委員長・森透（教職大学院）

事務局長・大和真希子（附属教育実践総合センター）

実行委員：学会員・教職大学院・院生・学生

本の紹介 教育実践と教育改革を考えるために

デボラ・マイヤー『学校を変える力—イースト・ハーレムの小さな挑戦—』 (北田佳子訳, 岩波書店, 2011年)



日本の教育実践研究にとって画期的な翻訳書が刊行された。デボラ・マイヤー『学校を変える力—イースト・ハーレムの小さな挑戦—』(北田佳子訳, 岩波書店, 2011年)である。

本書の原著 Deborah Meier, *The Power of Their Ideas: Lessons for America from a Small School in Harlem* (Boston, MA: Beacon Press, 1995/2002) は、1990年代後半以降の米国における学校改革議論の中で必ずと言っていいほど頻りに紹介される学校づくりの実践記録である。それは、かつて深刻な犯罪と貧困にあえぐ地域として知られたニューヨーク市のハーレムに1985年に創設されたセントラル・パーク・イースト中等学校の学校づくりの物語である。同校は深刻な問題を多数抱えた地域にありながら、驚異的な学力水準の高さと、退学率の低さと、大学進学率の高さを記録し、「イースト・ハーレムの奇跡」として公立

学校改革の希望となっている。また、校長として、そして一人の教師として同校の学校づくりを支えたデボラ・マイヤーの教育哲学は、ジョン・デューイ以来の社会民主主義の政治哲学を継承するものでありながら、教師はもちろん、保護者や子どもたち、そして学校外の人々の声にも誠実に耳を傾けた思慮深さを伴っている。誰もがコミュニティの一員となって共に人生の複雑さを探究していける場としての学校を目指し、そして、誰もが学び合う関係を築くことを重視する中で、徹底して生徒一人ひとりが安心して居られる場所を確保することに努めてきた同校の取り組みは、自ずと真正の学びをデザインすることにつながり、さらに、すべての人に開かれた学習成果発表会やポートフォリオでの修了認定など、評価改革の面でも画期的な実践を展開している。日本でも、たとえば本訳書の解説を執筆している佐藤学氏の「学びの共同体」構想の基盤の一つが、彼女の教育哲学と同校の実践にある。私(遠藤)自身も学部生の頃、同校の取り組みを知って深い感銘を受け、以後、同校の取り組みを一つの拠り所としながらカリキュラムと教育評価の探究を続けてきた。

本書は、このような精巧な公立学校改革のヴィジョンを、学校づくりの実践の中で実際に起こった具体的な事実から紡いだ貴重な長期実践報告である。しかも、翻訳を担当した北田佳子氏は、日米両国の学校改革実践に深く通じた人物であるという点では折り紙つきで、かつて福井大学での同僚として、彼女の実践を見る目の深さと確かさから本当に多くのことを学んだ。それゆえ、大きな信頼と安心感を持って読める訳書である。原著をお持ちの方ならすぐ分かると思うが、当てられている訳語は背景に通じているからこそ実現できる的確なもので、訳文も読みやすく仕上がっている。教職大学院の長期実践報告の新たなモデルにもなり得る優れた学校づくりの実践記録が最良の翻訳で読めるという点で、本訳書の刊行は日本の教育実践研究にとって画期的な出来事である。私たちの実践研究史の中にしっかり位置づけたい1冊である。
(遠藤貴広)

Schedule

4/23sat -24 sun 合同カンファレンス (9:30-17:00)
4/28fri -29sat 合同カンファレンス予備 (9:30-17:00)
5/21 sat 合同カンファレンス (9:30-12:30)

6/3 fri 福井大学附属中学校研究集会
6/25 sat -26 sun 実践研究福井ラウンドテーブル

[編集後記]

4月、新たな院生、スタッフを迎え、教職大学院はまた新たな一歩を踏み出しました。ニュースレター31号をお届けします。多様なメンバーが出会うことによって生まれる化学変化は、また新たな展開を生み出していくことでしょう。今年度もどうぞよろしくお願ひ致します。

(笹原未来)

教職大学院 Newsletter No.31

2011.04.22 発行
2011.04.22 印刷

編集・発行・印刷

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻
教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1 dpdtfukui@yahoo.co.jp